

岡山県重要無形民俗文化財

# 神郷太鼓田植

## 田植え唄

農民の仕事を励ます歌

太鼓田植は、古くは田楽として平安期からこの地に伝承されているもので、花田植や供養田植とは違って、農民の仕事の励ましの歌、仕事の歌として私たちの生活の中で最も身近な歌として生まれ、また、田の神に対する礼として今日までその伝統が残されています。

普通、田植歌と言われる中にも、太鼓囃子を入れるものと入れないものがあり、太鼓囃子を入れる歌には「朝の唄」「田の神」など千首以上の唄があります。太鼓を打つ「さげ」は、一日約千首の唄を歌っていました。

## 太鼓田植と保存会

伝統を守り続ける

太鼓田植は、昭和初期頃まで華やかに行われており、田植え時期には15～16日間太鼓を打って歩き、村外に出るときには夫婦連れで「さげ」と「早乙女」の意気の合ったところを見せていました。また、出稼ぎに行くと「さげ」は「早乙女」の2～3倍の賃金を得ていました。

その後、技術の進歩や農業の機械化によって共同で作業をすることがなくなり、太鼓田植も見ることがなくなりました。

こうした中で、昔年の華やかな太鼓田植をこの地からなくしてはならないと、昭和46年に神代郷土民謡保存会を結成し、地元小学生に伝承するなど、民俗文化財の保存に努めています。

平成20年3月7日には、岡山県重要無形民俗文化財に指定されました。

6月11日(日)に、岡山後樂園でも披露します。

## 太鼓田植とは

江戸時代中期に、田の神を祭る行事として始まったと伝えられており、昭和二十年代までは神郷地内の各地で行われていました。

この太鼓田植は、苦しい作業を少しでも軽く、楽しくして能率を高めるために「さげ」と呼ばれる男衆の打つ太鼓の音に合わせ、苗を植える「早乙女」と交互に田植え唄を歌いながら田植えをします。

